

戦後保健教育実践史研究
—千葉保夫「うんこの授業」の誕生の経緯とその分析—

賀谷 あゆみ 小浜 明

キーワード：実践史研究，保健教育，宮城県の小学校，“うんこの授業”

A Historical Study of Health Education's Practices in The Postwar Period
—Reviewing the practices of Mr. Chiba Yasuo—

Ayumi Kaya Akira Kohama

Abstract

The purpose of this study is to clarify how Yasuo Chiba of the Sendai municipal institution Toomizuka Elementary School developed a “Class of the Unko” which he practiced in 1976.

The class analysis is from two interviews that the author executed to Chiba and made public.

At that time, the class was taught to the fourth grade in the elementary school without the allocation of a health class.

As a result of the study, I understood that six factors were related to class development. After the class, the children were impressed about bowel movement and they understood a new discovery about their body.

Furthermore, the children experienced a changing understanding about one's excretion.

Key words : history study , health education practices, an elementary school in Miyagi Prefecture, a “Class of the Unko”

目次

- 1 問題の所在
 - 2 千葉保夫の略歴
 - 3 「うんこの授業」の誕生の経緯
 - 1) 学級づくりとしての保健の授業
 - 2) 実践の前提となった児童の健康実態
 - 3) 実践の前提となった学生時代の病気体験
 - 4) 実践の力となった宮城保健体育研究会と全国養護教諭サークル協議会からの学び
 - 5) 保健授業の自主編成
 - 6) 当時の排便教育の背景
 - 4 「うんこの授業」の分析
 - 1) 「うんこの授業」全体計画と授業記録
 - 2) 「うんこの授業」授業構成
 - 5 実践としての「うんこの授業」の特徴
 - 6 「うんこの授業」に関する考察
 - 7 今後の課題
- 謝辞
引用文献・参考文献

1 問題の所在

仙台市立遠見塚小学校教諭の千葉保夫が1976（昭51）年に実践した「うんこの授業」は、戦後保健教育実践史の中で、「授業の創出期」とされている時期に、より質の高い授業の創出を迫及した、実践の一つとして位置づけられている¹⁾。

千葉の「うんこの授業」については、授業のおおまかな構成や内容、教材、授業の特徴を宮城教育大学の数見隆生^{2),3),4),5),6)}や一橋大学の藤田和也^{7),8),9)}が明らかにしているが、「うんこの授業」が誕生する経緯と千葉自身の経緯は明らかにされていない。そこで本研究は、千葉が1976（昭51）年に実践した「うんこの授業」をどのように生み出したのかを明らかにすることを目的とする。

分析にあたっては、1976（昭51）年に千葉が初めて実践した「うんこの授業」の中で公表されたもの^{10),11),12)}、ならびに筆者が今回、千葉に実施した2回のインタビュー記録（第1回目のインタビュー：2009（平21）年5月9日午後1時から4時、千葉保夫宅にて。2回目のインタビュー：2009（平21）年12月16日午後6時半から8時、小浜明研究室にて）を対象に行った。

2 千葉保夫の略歴

千葉保夫は、1949（昭24）年、2月17日、宮城県栗原市花山北の前（旧栗原郡花山村北の前本沢）123番地で生まれる。父は洋服仕立て業、母は衣料品店を営んでいた。

1964（昭39）年、宮城県築館高等学校入学、1967（昭42）年同校卒業、同年福島大学教育学部小学校教員養成課程入学。1970（昭45）年、4年生の8月に原因不明の病で入院したため留年し、1971（昭46）年同大学卒業、同年4月より仙台市立遠見塚小学校教諭として勤務。その後、連坊小学校、鶴巻小学校など、いくつかの小学校で勤務し、2009（平21）年3月南小泉小学校で退職となる。

3 「うんこの授業」の誕生の経緯

1976（昭51）年に実践された「うんこの授業」は、当時、保健の授業がない4年生に4単位時間かけて実践された。授業誕生に至るまでには、さまざまな要因が関係していることが判明した。

1) 学級づくりとしての保健の授業

千葉はインタビューの中で、保健の授業を考える過程について以下のように述べた。

「子どもたちの課題ってというのは、たくさんあるわけでしょ。それは1ヶ月でわかるね。一番最初の出会いで、自己紹介っていうことで、書かせるわけ。体の不思議や疑問を。それを見て体への興味がわかる。学級づくりとして、関係づくりの中で、あの子を核にして、まとめていきたいな、とか、リーダーを作っていくんだね。そのためにテーマ選びをしていたし、資料探しをしていた。その中で、あの子とあの子にはあてはまるなど、リーダー役をきちんと明らかにしていくのも大事なんだよ。最初に書かせた疑問の中に〇〇ちゃんというのがでてくるわけ。その疑問をみんな読んで読む。いつも教材を探し続けていく、少しずつ掘り起こし続けていくんだ。」¹³⁾

千葉は、学級開きの最初の日に自己紹介がてら、子どもたちに自分の体への疑問や不思議を書かせている。それを元に、目の前にいる子どもがどんな疑問を持ち、どんな体験をしてきたのかを理解し、子どもたちの体験や課題を通して、学級づくりをしようとしたのである。

2) 実践の前提となった児童の健康実態

千葉は、当時の児童の実態を以下のように述べた。

「クラスで腹痛を訴える子どもは、一日にたいがい一人はいます。そんな時、私は、その子に必ずトイレに行くことをすすめます。子どもたちは、朝トイレに行かないで、登校してくることが多いのか？この方法で、痛みがとれ、また、元気に遊びだすという子どもが少なくありません。先日も、おなかをかかえて腹痛を訴える子がいたので、排便のようすを聞くと四日もトイレへ行っていないというのです。こんなことが、たびたびあります。…中略…こうした子どもたちは、食べることには、非常に関心を示しますが、その残りカスである老廃物を排泄することには、ほとんど関心を示しません。」¹⁴⁾

さらに子どもの実態や子どもの生活をどのように捉えて教材や授業に結びつけていくのかについて、インタビューの中で以下のように述べた。

「お腹が痛いと訴える子は、たいいてい同じ子であり、リズムがとれない子でもある。それは学力とも関係していると思うけど。うんこも意識していなくてもできる子もいて、そういう力をつけさせる、生活の中での課題を見つけていく視点は重要だと思うね。できている子も無意識だから、そこを考えさせることは大変なことなんだ。体は生活と関係しているから、大人でもできていない人もいるし、生活力と関係していると思うから、その力をつけさせたいと思う。」¹⁵⁾

子どもたちは「うんこ」に強く興味関心を持っている。しかし、自分たちがするうんこについては、ほとんど興味を示さず、無意識で排便しているという状態であった。無意識でも、きちんと排便習慣ができていればいいのだが、そうでない子どもが多く、便秘による腹痛を訴え、授業を中断することもあったようだ。千葉は、そういった子供たちの様子をきちんと捉え、授業に結び付けていこうと考えた。そして、子供たちの実態から、学ぶ意味を見出したと考えられる。

3) 実践の前提となった学生時代の病気体験

学生時代の病気体験について、インタビューの中で以下のように述べた。

「(大学時代の)病気・治療体験が身体へ

の一番のきっかけになっていますね。すごく体っていったいどうなっているんだという不安・疑問と関心がずっと錯綜していました。…中略…大学4年生の時に、会津磐梯山の北側の檜原湖ところで、バンガローのアルバイトをしていたんですよ。2年間くらいやったかな、4年生の夏のバイト中の8月に突然腰が自由に動かさなくなっただけ、ぎっくり腰かな？なんて思っていたんだけど、腰が痛くて伸びなくなり仕事ができなくなって福島の学生寮に戻ってきたのですが、寮にいてもだめで福島の日赤病院にいった検査をしたら、「入院しなさい」と言われ即入院だったですね。そして熱が続いたんですね。ずっと40度近い熱で、3ヶ月くらい、体重が36キロまで減りましたね、もうフラフラして立って歩けませんでした。治療途中で白血病の疑いがあるといわれました。最初はぎっくり腰で首と腰をロープで吊っていたんですがね、熱がぜんぜん下がらなかったですね。その後に看護婦さんに「絶対安静にしないとだめ」と言われ、「ベッドの上で食事も排泄もみなしなさい」といわれてね、それで困ってしまって、ベッドに寝ていながらうんちするってすごくたいへんなことなんだよね、ふんばれないんですよ。さらにウンチした後はすごく臭ってね、相部屋だったからみんなに迷惑をかけましたね。それで夜中にそっと抜け出して行ってうんちしたら、婦長さんにみつけられて叱られてね、今度そういうことしたら、「強制退院ですよ」と言われてね。そのくらいあなたの今の体は安静にして大事にしなきゃならないの、ベッドの上で排泄しなきゃだめくらいなのですよと叱られましたね。本人はまったく自覚ないわけね、そんなこと言われて私は落ち込みましたね。最後は病院の屋上から落ちこちたほうがいいんじゃないかと思うくらい、落ち込みましたね。けどなんかそのうち熱も下がって治ったんだよね。あれは白血病の疑いとか、膠原病とか、病名はいくつか変わりましたね。最終的には、2月ころ退院しました。ですから、教育実習は4年生の前半だから、終了していたんだね。でも就職試験は8月だからどこも受験できなくて、大学にもう一年間いるしかなくて、大学は5年間もいました。そしてお正月も帰れなくて、春休みに退院して4月ころまで自宅にいたんだね。それが一番ショックであり、人間のからだへ関心を持

つ動機だったように思いますね。」¹⁶⁾

授業の前提には、まず千葉自身が、自分の病気によって体について、疑問を持ち、強い興味と関心を持ったことがうかがえる。

4) 実践の力となった宮城保健体育研究会と全国養護教諭サークル協議会からの学び
宮城保健体育研究会（以下、宮城保体研に略）は、1970(昭 45)年ごろから中森孜郎を中心にはじめられた現場教師と研究者の実践研究サークルである。

全国養護教諭サークル協議会（以下、全養サに略）とは、1970(昭 45)年に発足し、養護教諭を中心とした、自主的に学ぼうとする人々の全国組織である。現在全国に 42 サークルあり、それぞれのサークルが地域で学習会を開催している。

宮城保体研の研究仲間で、はじめて小学校での保健の実践を報告したのは、仙台市立鹿野小学校教諭の三浦良喜の「鼻と健康」の授業で(1973(昭 48)年)あった¹⁷⁾。

千葉は、三浦について、インタビューの中で、以下のように述べている。

「うんこの授業をやってみようと思ったきっかけは、一番目は三浦良喜さんや数見隆生先生、中森孜郎先生方が保健「鼻」「わたしの歯」の授業をサークルで検討しながら自主的に授業研究（実践検討会）を鹿野小学校でやったことが大きな刺激になっていると思う。二つ目はサークルの一員として自分が授業提供する番がきていたと思っていたことがある。…中略…宮城保体研には保健の分野では数見隆生先生と三浦良喜さんがいましたね、三浦さんの発言は明解であこがれでしたね。…中略…だけど、やっぱり三浦良喜さんの授業力はすばらしかったですね。とにかくサークルの学習会は、とつても勉強になりました。しっかり子どもの側に寄り添った話をしていましたね。だから、すごいなと思う先生方が集まっていました。三浦良喜さんの仕事っていうのは、今後どう発展するんだろうってすごい興味を持っていましたけど、仙台から遠い片道 3 時間もかかる気仙沼の方の学校へ転勤になりサークルに参加する機会が少なくなり会に参加できなくなってしまいましたね。それで千葉ができることをやろうと考えて体育の授業研究後、保健の授業研究をやることにしたんだね」¹⁸⁾

さらに、「宮城保体研の学びの根っこには養護教諭のサークルの学びの輪があった。」¹⁹⁾と述べ、そこでは「養護教諭の先生との学び、山形の松田(信子²⁰⁾)さんや青森の土岐(満子²¹⁾)さんとの学びが大きい。すごく生活と関係して体を学ぶことができた。そこから子どもの見る視点を学ぶことができたと思う。体のことから病気を見つけるということを強く学んだ。」²²⁾と述べた。

千葉にとって、宮城保体研や全養サはさまざまな人物と出会う場所であり、勉強する機会でもあった。他の人のすばらしい実践を学びながら、千葉自身も大きく成長していったものと考えられる。

5) 保健授業の自主編成

当時、学習指導要領の小学 4 年生には、保健の授業の割り当てがなく、小学 5・6 年生に、体育の授業の 10%が保健の授業として割り当てられていた。そのため、当時の保健主事から教科書にはないと反対されたという。しかし、千葉は「子どもたちがやりたいって言うてるからやるんです」²³⁾と行って授業をしている。さらに「教科書のどこにあるの？って言われても、そうして子どもがやりたいって、子どもの要望があるんですよっていったら、後は誰も何も言わない、言えない。そういうものなんだね、教育は。」²⁴⁾と述べている。千葉は、教科書にある内容かどうか、ということではなく、子どもたちがからだについて、学びたい、知りたいと思ったことを授業にしたのである。

また、千葉は、「6 年生の子どもたちが理科の教科書を見たとき、いちばん最初に学習したがるのが「人のからだ」である。人のからだの学習は、学習指導要領の改訂ごとに少なくなってきた。…中略…子どもたちが理科の時間に、自分のからだや人間のからだのしくみや働きを学ぶのが 6 年間の中でわずか 5, 6 時間だけというのは、どう考えても少なすぎる。このような学習時間で、人間の生命を尊重したり、健康の増進を図る子どもたちが育つのだろうか、疑問である。」²⁵⁾と危機感を募らせている。

千葉は、子どもたちが人間のからだについて、多くのことを学びたい、知りたいと思っているにも関わらず、人間のからだを学習する時間が少なく、授業時間が確保されていな

いこと、そして何より自分のからだについて学ぶことさえできない現実に、非常に危機感を持っていたと考えられる。

6) 当時の排便教育の背景

千葉が「うんこの授業」を実践した、1976(昭51)年当時、排便教育は大阪教育大学の汲田克夫の影響によって、多くの実践がなされていた^{26)・27)}。1976(昭51)年の日教組教育研究全国集会の保健体育(保健)分科会では、大阪市立城東第5中学校の稲田常子が、「こどもにどう健康を自覚させるのかー排便教育に取り組んで6年ー」を発表している。千葉は、翌年の1977(昭52)年の日教組教育研究全国集会「能力・発達・学習と評価」分科会で「うんこの授業」を発表している。

この当時千葉は「大阪での実践は知らなかった。うんこの授業を発表してから、汲田さんより授業でやったのは画期的だったと声をかけられた²⁸⁾」とインタビューで答えている。

つまり、千葉の実践と稲田の実践は、当時お互いに影響を受けたわけではなかった。しかし、偶然にも同じ参考文献(日野貞男著『うんこによる健康診断』光文社カップホームズ、1969)を使って授業をしている点や、子どもの実態や社会的な状況に共通点があったためか、実践内容は違うものの、教材の素材となった資料には、共通点が見出せた。

4 「うんこの授業」の分析

1) 「うんこの授業」全体計画と授業記録

1976(昭51)年の「うんこの授業」は指導案として発表されているものがないため、全体計画と授業記録の一部²⁹⁾を示した。(表1, 2)

2) 「うんこの授業」授業構成

1976(昭51)年の「うんこの授業」は7月に、小学4年生に4単位時間かけて実践されている。時間配分は「導入」に1時間、「学習」に2時間、「まとめ」に1時間である。千葉のインタビューをもとに全体の授業構成をまとめると以下のようなになる。

①「導入」

自分たちのうんこを観察させ、その結果を全員で確認しながら、興味をもたせる。色や形、においなどの違いから、興味がない子どもと一緒に土俵に上げる。

導入は、授業の一時限目という枠ではなく、新学期の学級開きをしたその日に行うからだについてのアンケート調査や、授業の前に実物を観察させる行為も含むと考えられ、授業の前に、子どもたちの意欲を引き出すような、意図的な仕組みが考えられていた。

②「学習」

自分たちが観察してきた結果を確認しながら、子どもたちの考えやアイデアをもとに、うんこが作られる消化器官の仕組みや食べ物の消化と吸収について、人間の体の仕組みの基礎的なことを教える。子どもたちが自分たちで考え、それぞれアイデアを出し合う。千葉は、できるだけリアルな具体物を準備したいと考え、人体の解剖図のスライドやパネル、うんこのさまざまな様態図表、消化器官の紙模型などの教材を作成し、授業で用いた。

③「まとめ」

便秘や下痢など、要注意なうんこについて教え、生活の中で子どもたちがどのように生かしていくのかを考える。最後に感想文を書く。

5 実践としての「うんこの授業」の特徴

1) 観察

千葉は、「うんこの授業」を始めるにあたり、新学期の4月の段階で、学級文庫の中にうんこの本を入れている。その後、一部の子どもからうんこの勉強をしたいという要望がでるようになる。千葉は、クラス全員が授業をしたいといったら授業をするという条件をだし、授業をすることにした。

千葉はインタビューの中で、「子どもたちは、実物を観察して記録することによっていろんな疑問や感じをもつようになりますね。当時の遠見塚地区のトイレは水洗トイレでなく、ぼっちゃん便所(和式ため池型)があったようでね。そのようなため池式便所で自分のうんこを観察するって子どもたちは大変だったわけですよ。でも子どもたちは先生から観察をやりなさいと強制されたわけじゃないから、自分たちが勉強するために観察するのだから、自分たちでうんこを観察する工夫をしていましたね。排便後にライトで照らしたり、和式の便壺の脇のほうに新聞紙を置いたりしてね、ちゃんと工夫して観察したことを後日、子どもたちから聞きましたよ。またお母さんと一緒に観察している子もいましたね。だから授

業の前にそういう準備ができたことがよかったですね。この活動でどの子も学習への準備ができたことになるね、つまりうんこの学習の土台づくり、土俵にのってくれたことになるわけですよ。³⁰⁾と述べている。

授業の前に、子どもたち自ら学びたいと思わせるような仕掛けをし、自ら学ぶ意欲を育てているのである。

2) 教材・教具

授業の中では、「ウンコの観察表、ウンコの標本図、消化器のさまざまなリアルな写真パネルやスライド、口から肛門までの実物大の消化器の紙模型（図 1）、ウンコにかかわる実験の話などがなされ」³¹⁾、子どもたちがより実物に近いものを目にできるように、具体的な教材が工夫されていた。子どもたちは、実物に近いものから、自分のウンコや自分のからだを想像することによって、自分のものとして実感することができ、より集中して授業を受けることができたのではないだろうか。

3) 感想文

千葉は、授業後必ず子どもたちに感想文を書かせているが、それについて以下のように述べている。

「…中略…「面白かった。」というだけ書いている子には「何が」「どのように」おもしろかったのって必ず聞きかえさなきゃならないでしょ。すると一番おもしろかったのは「ここだ。」って、ワーク資料を見て話すわけで、それを書いてほしいって今まで何度も繰り返して話していたわけだから、始めから書く視点を提示したわけです。…中略…書く時間を確保してやらないと書けない子は書けないの。「学習ノート」を書くためには、もう一度学習した内容を頭の中でテープを巻き戻しして再生する作業をすることですから、たいへんなのです。その時間を確保してやらないと書けないとわかったので、その場を確保するのが基本と思ったのです。…中略…感想文からは子どもの姿がよく見えるよね。40人クラスの場合と20人とか10人とかの人数でクラスの雰囲気は違うね。授業は授業としてその場の構成者のみんなで作っていくわけだから、組み立て方っていうのは、実は、保健やからだの授業だけじゃなく、ふだんの授業で作られていくものだよね。…中略…私はこの教材・内容の持っているおもしろいとか値打ちがあるものとかを伝えること、受ける側はおもしろい、これは知りたいと思うものをどのように感じ受け取ってくれるのかって考え

表 1 「うんこの授業」全体計画（1976年）

<p>(1) 授業目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・排泄物（ウンコ）を通して、食べ物の消化、吸収のしくみを理解させ、排泄という生理現象が、からだの調子や健康な状態を知る手がかりになるということ知らせたい。 ・自分のからだの生体現象を通して、人間のからだのすばらしさを知り、そのすばらしいからだの生命を守り育てるには、どうすればよいのかを考え、行動できる子どもに育てたい。 <p>(2) 授業全体計画</p> <p>(ア) 排泄物について・・・1時間</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ウンコの観察 ・うんこの色や形、におい ・要注意のウンコと健康なウンコ <p>(イ) 食べ物の消化と吸収のしくみ・・・2時間</p> <ul style="list-style-type: none"> ・消化器官のしくみとその働き ・食べ物の消化と吸収 <p>(ウ) ウンコと健康・・・1時間</p> <ul style="list-style-type: none"> ・便秘と下痢 ・ウンコの色 ・要注意のウンコと健康なウンコの検討
--

表 2 授業記録（一部抜粋）

－ 第 1 時限目の授業記録－ [] は板書事項

T	みんなが調べた表をみながら、今日はどんな形や色のウンコがあるのか話し合い体の異常を知らせるウンコと健康なウンコの色と形を予想します。	T	他にない
C	俺の茶色のウンコだぞ。(小さな声で)	C	黄土色
T	みんなのウンコには、どんな色がありましたか。ハイ、斉藤	T	黄土色のウンコが出てきた人、手をあげてハイ(大部分の子の手があがる)
C	大体の人は茶色のウンコのようにだよ(小さな声で)	C	他にない
斉藤	茶色でした。[茶色]	C	ない、ない
T	茶色のウンコがでてきたという人、手をあげて。	T	ではどうしてこんな色のウンコがでてくるの(一瞬シーンとなる)
C	ハイ、ハイ(3/4 くらいの手があがる)	天野	わかった
T	他になかった。ハイ、津田	T	ハイ、立花
津田	私は、すっかりまざってはいなくて、黄土色と茶色にわかれていたのができました。	立花	食べ物のちがいで色がつくと思う
C	おれもだ	那須	立花君に質問、では、赤トマトを食べたら赤いウンコがでてくるのですか。
C	うんだ、半分ずつ分かれてな。	立花	食べ物の種類で、ウンコの色がちがうのではないかと思うのです。
C	うん、ひとつの色でなくて、別々な色にわかれて、でてきたんだ。	天野	那須君は、そう言っていますが、ぼくがホウレン草をたくさん食べすぎたとき、緑色のウンコがでてきたときがあります。[食べすぎ]
T	ウーム、では黄土色+茶色にするか。	那須	それは食べすぎて、生のままでてきたのではないですか。
津田	ハイ [黄土色+茶色]	T	みんな、食べ物と同じ色のウンコができたことある、その人手をあげて。
T	津田さんのようなのがでてきた人、手をあげて。	C	ハイ、ハイ・・・(数人の手があがる)
C	ハイ、ハイ(1/4 くらい上がる)		

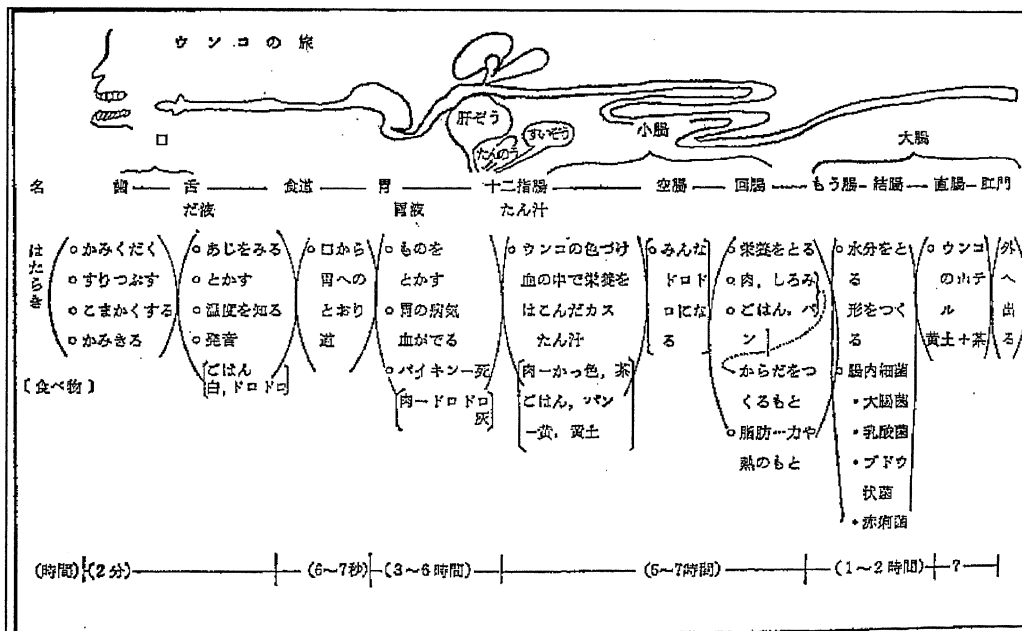


図 1 2・3 時限目の授業記録（板書）

よりよい方法としての教具づくりや授業内容構成をすることになるよね。その反応・返事が感想文ということになるかな。その準備は教師の大事な仕事だって気がするし、子ども達の一人ひとりがどこに興味を感じ、何を受け取ったのかを読み取る資料としての感想文は欠くことができませんね。³²⁾」

感想文によって子どもたちの思いや姿が明かになることによって、千葉自身も子どもたちと同じように共感し、子どもたちに励まされ、さらに意欲的に授業づくりに取り組んでいったものと考えられる。

6 「うんこの授業」に関する考察

授業後の子どもの感想と保護者の感想文を表3³³⁾に示す。

子どもたちの感想から、子どもたちはウンコについて、感動し新たな発見をしていること。また、今までウンコを意識していなかった子どもたちが、学習を通して、自分のウンコ（生活）を見直し、再び自分の排泄に対する意識が変わりつつあるということが分かる。

このことから、千葉がこの授業を通して伝えたかった、「排泄物（ウンコ）を通して、食べ物の消化、吸収のしくみを理解させ、排泄という生理現象が、からだの調子や健康な状態を知る手がかりになるということ知らせたい」という目標は、ある程度達成されたと考えられる。

7 今後の課題

今後は、千葉に大きく影響を与えたと考えられる、宮城保健体育研究会のメンバーにインタビューを行い、彼らが千葉の実践を支え、育んでいった経緯を明らかにし、千葉が保健の授業実践者として成長していった経緯をより鮮明にしていきたいと考える。さらに、その後2回発表されている「うんこの授業」の実践も、変遷していることから、さらに検討していくことも今後の課題としたい。

表3 感想（一部抜粋）

子どもの感想

・うんこをべんきょうしたとき、色がおうど色や茶色のウンコが、どうしてそんな色になってでるのかふしぎでした。天野君が、ほうれん草をたべすぎて、みどりのウンコをたったときいて、ぼくはびっくりした。だけど、あとから津田さんや立花くん天野君がそのことについて、どうしてだかいつてくれたので、はじめてわかった。あと、ウンコをかかさつしたとき、バナナ状のとき、おうど色と茶色にわかれているのがあってびっくりした。（松木）

・ぼくは、うんこの形は、肛門でつくられると思っていました。それと結腸の中に、び生物がいるとゆめにも思っていませんでした。あと、大腸で水分をとるとでましたが、その水分は、いったいどこへ行くのですか、それと腸内菌は、いったいどこからきたのだろうと思いました。ぼくは、もっとウンコの勉強をしたいです。（天野）

授業を参観した母親の感想

私の兄が胃ガンでなくなったのは、つい二ヶ月半程前です。51才になったばかりで働き盛りだっただけに、つくづく生命の尊さを感じました。若いのと、普段自分の健康を過信して、ちょっとした危険信号を見のがしていたため、病状が相当進んでいたことに本人をはじめ、まわりの人達も気づかず、病院に入って二ヶ月と云う短期間で亡くなりました。…略…ウンコと云う汚物的存在を人間誰しも感じすぎるくらいがあるのは、反省すべきと最近私は、特に思います。ウンコは胃や腸の状態によって変化し、体のコンディションを示し、又精神的な変化にまで敏感に反映してくれるからです。

授業を参観しておりますと、子供達は真剣に自分の身体の調子や健康状態を知ろうと一生懸命、瞳を輝かしています。それにしても子供達は身体に対する沢山の疑問をもち、知りたがっていると、本当に驚きます。そしてその事に気づき指導してくださる数見先生、千葉先生には心から感謝致します。

3回にわたる授業で子供達の中から、そしてウンコに対する疑問は解消された事と思えます。（高野）

謝辞

本研究をまとめるにあたり、千葉保夫氏には多大なるご尽力をいただきました。心から感謝いたします。

引用文献

- 1) 共同研究・保健教育 A 班：「保健授業究」の検討，学校保健研究，27，11,524-520，1985
- 2) 森昭三，和唐正勝編著：新版保健の授業づくり入門，大修館書店，190-212，2002
- 3) 数見隆生：生きる力をはぐくむ保健の授業とからだの学習，農文協，140,135-140，2001
- 4) 数見隆生：保健授業がめざす子ども像，体育科教育，28（8），27-29，1980
- 5) 数見隆生：千葉保夫さんの一連の実践について，教育，43（1），101-103，1993
- 6) 数見隆生：科学的な保健認識をどう育てるか，体育科教育，25（4），39-42，1977
- 7) 藤田和也：すぐれた保健授業に学ぶ，体育科教育，41（9），42-44，1993
- 8) 渡部基，森昭三：保健教材の展開方法の定式化，学校保健研究，32（10），497-506，1990
- 9) 川合章：教育の課題としてのからだ，体育科教育，28（8），2-5，1980
- 10) 汲田克夫ほか著：増補版 こどもの排便教育，医療図書出版社，147-188
- 11) 千葉保夫：ウンコの授業，教育文化，第146号，9-18，1976
- 12) 千葉保夫：うんこの不思議排便のふしぎ，農文協，10，10-11，2003
- 13) 千葉保夫へのインタビューより(2回目)：2009年12月16日午後6時半から8時，小浜明研究室にて
- 14) 千葉保夫：前掲10
- 15) 千葉保夫へのインタビューより 前掲13
- 16) 千葉保夫へのインタビューより(1回目)：2009年5月9日午後1時から4時，千葉保夫宅にて
- 17) 千葉保夫：楽しくわかる保健の授業の創造をめざして，体育科教育，31(9)，22-24，1983
- 18) 千葉保夫へのインタビューより 前掲16
- 19) 千葉保夫へのインタビューより 前掲13
- 20) () は筆者が加筆
- 21) () は筆者が加筆

- 22) 千葉保夫へのインタビューより 前掲13
- 23) 千葉保夫へのインタビューより 前掲16
- 24) 千葉保夫へのインタビューより 前掲16
- 25) 千葉保夫：前掲17
- 26) 千葉保夫：前掲17
- 27) 田中孝彦：生活・学習の意欲を高める教育実践の課題，国民教育，32号，39-48，1977
- 28) 千葉保夫へのインタビューより 前掲13
- 29) 汲田克夫ほか著：前掲10
- 30) 千葉保夫へのインタビューより 前掲16
- 31) 数見隆生：前掲6
- 32) 千葉保夫へのインタビューより 前掲16
- 33) 汲田克夫ほか著：前掲10

参考文献

- 1) 日野貞男：うんこによる健康診断，光文社 カップホームス，1969
- 2) 小浜明，戸野塚厚子：戦後保健教育実践史研究，日本教育保健研究会年報，第2号，1995
- 3) 小浜明：保健の授業担当教師の力量形成についての研究，日本教育保健研究会年報，第3号，1996
- 4) 小浜明：小出義人の「結核症の授業」再考，東北工業大学紀要Ⅱ 人文社会科学編，第20号，2000
- 5) 小浜明：齋藤具央「加賀野の水」の授業，東北工業大学紀要Ⅱ 人文社会科学編，第21号，2001